

〔巻頭言〕

## 消費者からの要望・生産者からの要望

小林 秀 樹

アジア・太平洋戦争は日本人の創意工夫により、工業部門だけでなく食料加工部門においても外国の研究者には考えもつかない様々な先端かつ奇抜なものを創りあげる原動力となったことはいうまでもないことです。敗戦では終わったものの、金も物も無い貧しい国はその後、大型タンカー、ロケット原基、精密機器類、冶金、有機合成など数多くの分野で世界を牽引してきました。暗視野スコープ技術は世界の追従を許さないほど突き抜けていますし、実はステルス技術も日本が開発したものです。近年では、外見上、日本製品と同じようなものを安価に生産する国も出てきました。しかし、それらの製品を使った結果、ビルの斜傾、橋の崩落、電車の脱線などいくばくの耐久性のない粗悪品も多くあることが露呈しています。日本製品は1本の鋼管を商品化し販売するために、いかに多くの試行を繰り返し、品質管理を徹底しているかがこのような差異として現れているのです。

一方、近年のアジアをみると、まだまだ裏庭養豚も多くありますが、北米を中心に外国資本による企業養豚が漸増し、日本と比べはるかに安い光熱費と多くの現地労働者が品質管理をしています。国営あるいは民間の巨大養豚場も増えつつあります。

波岡先生は日本のSPF豚の礎を築かれました。それからSPF豚の定義にいくつかの疾病フリーを盛り込み商業的SPF豚ができました。それから、はや30年、生産性は大きく向上したといえるでしょう。しかしながら、北米や新興国の豚肉と明確な差別化を図らねばならない時代となっています。しかも早急に対応しなければならないのです。生産者のみならず消費者の要望を第一に考え、何を差別化の対象として取り組むのか真剣に考えなければならないのです。畜産を取り巻く、アジア・太平洋戦争がまさに始まろうとしているのです。